



TITLE:

宋初における二三の禁令とタング
ート問題: 李繼遷の興起をめぐって

AUTHOR(S):

岡崎, 精郎

CITATION:

岡崎, 精郎. 宋初における二三の禁令とタングート問題: 李繼遷の興起をめぐって. 東洋史研究 1959, 18(1): 39-54

ISSUE DATE:

1959-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148134>

RIGHT:

宋初における二三の禁令とタングート問題

——李繼遷の興起をめぐつて——

岡 崎 精 郎

一

およそ中國民族の歴史において、塞外諸民族との通婚・混血が少なからぬ意義を有することは、諸家の指摘されたところであるが、中國史上、中國民族と塞外諸民族との通婚はその由來きわめて古い。秦漢以來、塞外諸族の中國内地に移住するものが漸増したのであるが、殊に魏晉南北朝の際、五胡諸民族の内地に雜居するにおよんで、華北における中國・塞外兩民族の通婚はむしろ通常の事實となつたのであつて、清末の人、黃節は、

猗 兜之裔(拓跋魏)。……乃假中國之禮樂文章。而冒其族姓。隋唐以降。胥爲中國之民。且進而爲士大夫。以自旌其門閥。高門大姓十五。而非五帝三王之支庶。婚官相雜。

無與辨之矣。

と説いている(光緒三十二年度の「國粹學報」史篇所収の「黃史頻復記」)。桑原隲藏博士は諸例證をあげられつつ、唐代の蕃漢通婚の事實を指摘されたが、その結論として、「之を要するに、唐時代には、原則としては蕃漢の通婚を禁止せざりしが如く、又事實としてその通婚の實行されしこと疑を容れず。」と説かれ、なお續けて、「宋時代も大體に於て唐時代と同様なりしならんと想はる。」とのべられている。⁽²⁾

しかしながら、博士の指摘されている如く、さきの蕃漢通婚は中國内地に歸化移住せる外民族との通婚に限られたのであつて、その入貢通商の目的を以て中國に一時的に僑居せる外民族が、通婚せる中國女性を外地に伴い還ること

は、すでに唐初より禁止されていた。すなわち、貞觀二年（六二八）六月十五日の勅には、

諸蕃使人。所娶得漢婦女爲妾者。竝不得將還蕃。（唐會要

一〇〇雜錄）

とて、これが禁令をみており、さらに、唐律疏議卷第八、

衛禁下、越度緣邊關塞條にも、

共爲婚姻者流二千里。

との本文に對する疏議に、

諸蕃人所娶得漢婦女爲妻妾。並不得將還蕃內。

とみえる。

右の唐律疏議と同文が宋刑統八、衛禁律、越度緣邊關塞條にみえるのであつて、宋代にも同様の規定があつたわけであるが、しかしその實際は果して如何であつたろうか。

二

右の問題に關連して、まず挙げられるのは、宋の太宗の太平興國八年（九八三）二月十日の詔文である。すなわち、宋會要、方域一二之三、關棧錄の條に、

詔曰。近戎人歲貢馬。所過州縣。多私市女口。出邊關。

自今謹捕之。敢以女口私市。與賊人者棄市。吏知而不以聞者。論如法。

とあり、同書、兵二七之一には詳しく、

詔。應有蕃部將帶人口入蕃界者。宜令所經歷及次邊州縣軍鎮。常切驗認收捉。不得放去。如有將人口貨賣。與蕃人。及勾該居停住。並依格律處死。驗認到人口。便仰根問來處。牒送所屬州府。付本家。仍令逐處粉壁曉示。

とある。以上、宋會要の二記事の中、方域一二之三の記載には私市の對象をしるして、「女口」とのみあるが、兵二七之一の記事にはただ漠然と「人口」とあるのみで、果して何れに従うべきかが問題となるが、續資治通鑑長編卷二四（同年二月丁酉條）の對應記事には明確に「女口」とあるのであつて、これに従うべきものと考えられる。女口の字面は他にはあまり見當らないが、舊五代史（一〇三、後漢隱帝紀下、乾祐三年夏四月丁丑條）にも、「尙食奉御王紹隱除名。流沙門島。坐匿軍營女口也。」とみえ、女子の謂に他ならない。⁽⁴⁾さらに、以上宋會要の二記事にみえる「戎人」或は「蕃部」は長編卷二四の對應記事には「内屬戎人」とあるのが注意されねばならない。内屬戎人の字面はもとより、

中唐以來、中國に内屬せるタングートを意味するが、この禁令の出された具體的な事情としては、あたかもこのころ引きつづいてみうけられた、タングート諸族の入貢事件が考慮されるのであつて、前々年たる太平興國六年（九八一）には、府州（陝西省府谷縣）の「外浪族の首領、來都ら」（宋會要方域二之一、府州條）が、さらに同七年二月庚午には、豐州（陝西省府谷縣西北）の「大首領黃羅ならびに弟、乙蚌ら」（長編二三）が、夫々馬匹をもたらし來貢している。これに對し、宋初以來入貢をくり返した河西ウイグルは太平興國五年（九八〇）三月に來貢してより（長編二一・宋會要蕃夷四之二）、以後しばらく入貢をみず、吐蕃の如き、乾德五年（九六七）に入貢してより（宋史四九二吐蕃傳）、この禁の出するまで全くその迹を絶つていたのであつて、禁令の出された直接原因はタングートの入貢問題にありとして宜いであろう。實際、府州・豐州のタングートは宋の馬匹獲得の有力なる對象であつたのであり、それは、宋會要（兵二四之二、馬政六、雜錄）に、「又有招馬之處」として、

麟・府州則有党項。豐州則有藏才族。環州則有白馬・鼻家・保家・名市族。

とあり、麟（陝西省神木縣北）・環（甘肅省環縣）二州のタングートとともに列擧されているのによつても明らかであろう。さて、タングートの入貢に際し「女口」を私市して伴い還るものがあり、その間にあつて密貿易を営むいわば奴隸商人的な徒輩の認められることは注目すべく、かかる徒輩に對して棄市という嚴刑が課せられたのであつたが、宋がえて寛刑の美名をすてて極刑をとつたことによつてもこの禁令の重視されたことが窺われよう。しかもこのころ、タングートの馬匹到來をめぐる私貿易は盛んに行われたのであつて、さきの禁令に先立つこと一年有餘、太平興國六年（九八二）十二月に馬匹の私市に關する禁令をみるにいたつたことは注目される。すなわち、宋會要、兵二之一、買馬條に、詔。歲於邊郡市馬。償以善價。内屬戎人驅馬詣闕下者。悉令縣次續食。以優之。如聞。富人皆私市之。致戰騎多闕。自今一切禁之。違者許相告發。每匹賞錢十萬。私市者論其罪。中外官犯者所在以聞。

とある。しかも、かくして市馬を圓滑ならしめる目的を以て出された私市の禁が、わずか二年の後、太平興國八年十二月にいたり、俄に解除せられたのは注意すべく、それは

あたかも女口の私市の禁と年を同じうするが、解禁の事情は長編卷二四(同年同月己酉條に、

詔。戎人鬻馬。官取良而禁鬻。又禁民私市往來。道死者甚衆。戎人少利。由是。歲入之數不充。自今委長吏護市馬之良鬻者。印以試之。許民私市。

とみえる如くであつて、歳入の頭數不足はすなわち軍馬の不足を意味するのであり、これが打開のための窮策として、解禁はもとよりやむをえぬものであつたろう。

かくみ來つて、同じき年、一方では女口の私市の禁をみ、他方、前年來の馬匹の私市が解禁されたという、この間の事情を解明するには、この當時における西北邊の政治情勢と對應せしめて考察せねばならない。けだし、そこには、女口の塞外へ赴くのはあくまで防止すべく、他方では軍事上、軍馬の輸入は極力確保すべしという特殊事情が生じていたが、それはすなわち、西北邊における緊急事態の勃發によるものであつた。ここで姑く、當時の西北邊の状況を顧みよう。

三

すでに中唐以來、タングートの東北方への遷住をへて、陝西・寧夏・甘肅一帯にわたつて、蕃漢混住の複合地域が形成されつつあつた。すなわち、宋初、タングートの居住地域としては、靈(寧夏省靈武縣)・夏(陝西省榆林縣西北)・綏(陝西省綏德縣)・麟・府・環・慶(甘肅省慶陽縣)・豐などの諸州の他、鎮戎(甘肅省固原縣)・天德(陝西省榆林縣西北)・振武(山西省朔縣)などの諸軍があげられ(宋史四九一黨項傳)、なおこの他、涇州(甘肅省涇川縣)・原州(甘肅省鎮原縣)方面にも少し年代を降つてタングートの所在がみとめられる(長編八二、大中祥符七年夏四月甲戌條、涇原都鈐轄、曹諱の言など)。かくして西北邊においては、蕃漢混住という特殊情勢をみたのであるが、その實況に關し、太平實字記卷三七にはタングートの最大勢力たる夏州について、

皇朝管漢戸二千九十六。蕃戸一萬九千二百九十。

とあり、少しく降つて淳化五年(九九四)四月の記錄には、「銀・夏州管内蕃・漢戸八千帳」(宋會要方城二二之二、府州條、折御卿の言)とみえる。さらに太平實字記卷三六には靈州について、「蕃漢相雜」とし、さらに同書卷三七には會州・通遠軍・保安軍について、夫々蕃漢相雜われる實情

をしるしており、別に府州については、「府州蕃漢雜處。號爲難治。」（宋會要方城二一之五、景德二年八月の詔）ともみえているのである。

而してこれらタングート諸族の中、その中核をなすものは實に夏州タングート李氏であり、唐末、定難軍節度使として西北邊境に地歩を占め、以後、五代の間をへて漸次その勢力を強化し、後唐の明宗のときの如き、その征討軍を撃破して逐次半獨立體制を固め來つた。⁽⁵⁾ 宋朝という壓倒的な勢力の出現によりこれに屈服した李氏は、宋初において、李彝興から李克睿へ、さらに李繼筠から李繼捧へと繼襲を重ねつつ、その間少くとも表面的には宋への服屬をつづけて、定難軍節度使を襲つたのであつたが、太平興國七年（九八二）五月、夏州タングートの部長、李繼捧が繼承問題にからむ部内の動搖を收拾しえずして宋へ内附した結果、所管の夏・銀・綏・宥四州は、舉げて宋に獻ぜられ、宋は「州の酋豪二百七十八・部族五萬帳」（武經總要前集一八上）を手中に収め、かくしてタングートの完全歸服をみたと思われた丁度その矢先き、翌六月、繼捧の族弟、繼遷の叛亂勃發により、西北邊の情況は宋にとり俄然惡化の一途を辿

つた。同年十二月、雌伏半歳ののち、人心動搖の虚に乗じて繼遷は最初の出撃を夏州に加え、これは梁迥の増援軍に阻まれて果さなかつたが（宋史二七四梁迥傳・西夏書事三）、あたかもこの事件に近接して同月辛亥、詔を下して銀・夏等州に曲赦の令が發せられたのは（宋史四太宗紀）、動搖を續ける同方面の人心を懷柔せんとしたもので、蕃漢複合地域に對する宋の支配統制への苦心の程を窺わしめるが、しかも西北邊の動亂は依然として擴大するのみであり、越えて翌八年（九八三）に入るや、五月には葭蘆川に、九月には三岔口に、十二月には宥州において、夫々戰端がくりひろげられた（宋太宗實錄・長編二四・西夏書事三）⁽⁶⁾。

以上の如き西北邊の新情勢を顧みるとき、女口の私市の禁令が出され、さらにそれと幾何も時日を距てずして馬匹の私市が解禁された事情も自ら判然とするであろう。かかる非常事態に即應して、女口の私市の禁令は發せられたのであるが、それは漢人女子の出塞禁止規定を現實の問題に適應せしめて具體化せるものというべく、女口の私市という形態をとつた人口の蕃部没入を嚴禁して、西北邊のきわめて困難なる事態に備えんとしたのであつた。

かかる宋側の意圖をさらに明確ならしめるものは、この禁令の出されたのち三ヶ月にして發せられた西北邊流民の収容命令であり、長編卷二四、太平興國八年五月條には、先是。關隴貧民多流亡入蕃部。乙亥。詔所在長吏。設法誘之。令復業。

とある。さらに重ねて同年十二月壬午朝にも招集命令が出されたのであつて、同書同卷には、

令綏・銀・夏等州官吏招誘沒蕃民。令歸業。仍給復三年とみえる。蕃部没入の流民に對する回收策は唐初・五代後周などにおいても屢々とり上げられたところで、唐初、武德九年（六二六）には唐の高祖は突厥の頡利可汗をして掠むるところの漢人を悉く還さしめ（舊唐書卷二太宗紀上・同書卷一九四上突厥傳上）、越えて貞觀五年（六三二）、太宗は使を遣わして、隋末に突厥に没した漢人八萬口を金帛を以て贖わしめたのであり（舊唐書卷三太宗紀下）、五代後周の世宗は顯德二（九五五）年、詔を發して、陷蕃戸にして「自蕃界來歸業者」に對しては、その外地滯留期間の長短に應じて土地を付與してこれが撫恤に努めたのであつた（舊五代史卷一一五世宗紀二）。宋においても、太祖は燕雲十六州にあつて遼に没

せる漢人を贖うべく考慮し（長編一九、太平興國三年冬十月條）、太宗また燕雲十六州の漢人の回收を考慮したのであつたが（長編二〇、太平興國四年六月辛酉條）、いわば傳統的政策ともいふべきこの陷蕃漢人の招收策は東北方面においては具體化せず、いまこの西北邊の緊急事態に直面して發動されたのであつた。なお、この流民回收策たるや、宋の流民對策としてきわめて早期のものとして注意すべく、後年、慶曆八年（一〇四八）の河北路の水害による流民續出に際し、富弼が流民救済に着手したのは、流民の發生と京東路への流入がひいては遼・西夏の侵入を恣ならしめることが憂えられたがためであつたが、ひとしく外族との關係が流民對策の根底に存したことは注目をひくのである。

流民招收という新たな一石の投ぜられた結果、李繼遷側の動搖著しく、この年の十二月、繼遷が宥州攻略を試みたのも、實にこれがために他ならなかつた。それは謀臣、張浦の獻策に基いたものであつたが、かれは、「蕃衆飢え敝る際、中國、財粟を以て流民を招撫すれば、親離れ衆散じ、殆んど支うべからざる形勢に處すべく、富庶にして、かつ横山を恃みて界となす宥州の要害に據るべし」と説い

たのであつた（西夏書事三）。しかもこの一舉は完全に失敗に歸し（長編二四）、逆に夏州タングートの多數の離叛を招いた上、宋側はなお、「十年以來、我人掠むるところの人畜凡そ二萬五千口」の奪回に成功したのであつた（宋太宗實錄二九、太平興國九年三月丁巳條）。

それでは宋がかく迄も塞外流出人口の回収に努めた理由は何であつたか。もとよりそれは、陷蕃漢人がタングートによつて利用されるのを恐れたものとみるべきである。すでに太平興國二年（九七七）、罪囚の配隸地が五代以來、西北邊—秦州・靈州・通遠軍および沿邊諸州—であつたのを廣南に改めたのは、漢人罪囚が「多亡投塞外。誘羌戎（『タングート』爲寇）」。せるがためであつたが（長編一八）、外族内部における漢人の役割は宋代にいたつて著しく、それは丘濬の大學衍義補卷一五四、治國平天下之要、馭夷狄、四方夷落之情（中）に、

宋之契丹・拓跋（『タングート』）。其地與衆。未必過此二虜（唐の突厥・回鶻）。然契丹得幽燕十八（六之譌）州地。拓跋盡有與夏之境。據中國地。用中國人。爲中國害。此宋邊患所以比唐爲甚。

と指摘せるところである。實際、宋初においても、繼遷の傘下には「謀主」と稱された張浦をはじめとして、政治・軍事兩面における漢人の活躍がみうけられ、タングート熟戸においても、

初緣邊軍民之逃者。爲熟戶畜牧。

とて（長編一一一、明道元年七月甲戌條）、畜牧のための勞働人口として活用された場合もあり、なお、後年、西夏における記録ではあるが、

得漢人勇者爲前軍。號撓令郎。若脆怯無他伎者。遷河外耕作。或以守肅州。

と伝えられる（宋史夏國傳下）のも参照すべく、政治的指導者、或は軍隊指揮者として、さらには勞働人口、或は戰鬥員としてタングート勢力の増強に資する可能性をもつ漢人の没入はとりも直さず宋側への大なるマイナスを意味するのであり、それ故にこそ、宋として陷蕃漢人の奪回に努めたのはおよそ當然といわねばならない。女口の私市を禁じて、その蕃中没入を禁じたのも、また以上の工作と一連のものともみなさるべく、それは陷蕃漢人の招收とともに宋側の工作の兩翼をなすものとして重要であつたのである。

四

しかも、李繼遷のまき起した西北邊の動亂は宋の壓力を排していよいよ擴大したのであり、動亂によつて一段と窮乏化した同方面の漢人の慘狀は掩うべくもなかつた。その結果、以上みた如き、宋の漢人確保への努力にも拘わらず、西北邊漢人のタングート没入はやむべくもなく、それは人口賣買の頻發となつてあらわれたのであつた。宋會要、兵二七之三、備邊條に、淳化二年（九九一）六月にかけて、

詔。西路諸州山川路口鎮寨。不得放過販賣人口入蕃。及指揮漢戶不得停泊。如有故違。官中察探得知。或被人陳告。勘鞫不虛。所犯人。當行嚴斷。

とあり、さらに翌七月にかけて、

原州言。與使臣及轉運使司。共取贖到蕃人所買男女數目。先是。邊境人戶飢荒。多賣男女。與蕃中部落。帝聞其事。頗甚憫惻。特遣使臣與轉運使。同以物貨取贖。各給還父母。

とある。しかも、かくして賣買された子女の價格はわずかに錢千文に満たぬ場合すらあつたのであつて、少しく後年の

記録ではあるが、長編七三、大中祥符三年（一一〇一）六月丙辰條に、陝西における子女賣買とこれが取贖とをのしした中に、

先是。陝西饑民有鬻子者。口不滿千錢。詔官爲購贖。還其家。

とある。この價格については宋代の諸物價が参照さるべく、瞿宜穎纂輯「中國社會史料叢鈔」（甲集中冊三三—三五頁）、宋物價彙記の條には魚・馬・狗・酒などにわたつてデータを集めているが、年代を接近せるもので、しかもタングートの產物たる青白鹽の價格が、宋初、一斤十五錢位と傳えられているのは、比較さるべき資料としてとくに重要であろう。

しかし乍ら、かかる度重る處置にも拘らず、西北邊漢人の人口賣買は依然として迹を絶たなかつたのであつて、ために天禧二年（一〇一八）十二月甲午、さらにこれが處置が講ぜられねばならなかつた。長編卷九二に、

詔。如聞。邠・寧・涇・原州流民多往秦・隴州故關山及渭州山外鎮戍軍以來逐熟。慮無知者誘略人口。鬻於蕃界。宜令所在州縣泊巡檢使臣察舉之。

とあり、宋會要、兵二七之二〇の對應記事には、「令所在州軍鎮駐泊巡檢使臣覺察犯者。依律區斷。」とある。この記事にも窺われるように、人口賣買圏はタングート地域のみに限られず、秦・儀兩州の如き、宋初より吐蕃の居住地域であり（宋史四九二吐蕃傳）、秦州ではすでに大中祥符四年（一〇二二）よりウイグルの出現をみたが（長編七五）、さらにさきの事件の翌天禧三年（一〇一九）六月辛丑には詔して、「自今略賣人口入契丹界者。首領並處死。誘致者同罪。未過界者。決配淮南州軍牢城。」（長編九三）といい、契丹方面への人口流出もみられ、人口賣買の地域の漸次擴大せることは注目すべきであるが、かかる現象の發端が實にタングート地域であつたことは重要であらう。

およそ人口賣買の事實は中國においては古くよりみられ、爾後引きつづいてみうけられるのであつて、秦漢時代には既に「入市」があり、それは唐・元・明の際にも依然として認められるのであるが、¹⁰¹ さきにみ來つた宋代の人口賣買はそれがタングートをはじめとする外民族に直接かわるものであつただけに特殊な面をもつ。これを漢・蕃双方の立場よりみた場合、唐代にはタングート側よりする人口賣買

が漢人商人の手を通じて行われたこと、さきに指摘せるが如くであつて、それは唐代に盛行した外國奴隸の一環とみなされるものであるが、¹⁰² 一方、唐・五代の際よりタングートが漢人或はウイグル人を捕えて賣買した事例が屢見するのであつて、「金剛經鳩異」（段成式・酉陽雜俎續集卷七所収）には

永泰初（七六五）。豐州烽子暮出。爲党項縛。入西蕃（吐蕃）易馬。

とみえ、舊五代史卷一三八党項傳には、

自河西回鶻朝供中國。道其部落。輒邀劫之。執其使者。賣之他族。以易牛馬。

とある。以上の場合、人口を掠奪して飼畜に交換するといふ、きわめて原始的なやり方であつたのに對し、宋代に入つては新たな面を生じているのが注目をひく。すなわち、長編一一一、明道元年七月甲戌條に、

初緣邊軍民之逃者。爲熟戶畜牧。又或以遣遠蕃易羊馬。故常沒者數百人。

とあるが、さきの場合の如き原始的な面の他に、計畫的な人口確保に出ている點が指摘さるべく、かかる新なるやり

方は、時あたかも西北邊の動亂により漢人の窮乏化がすすむにつけこんで、人口賣買の手段による人口獲得工作として結晶したのであるが、その場合、中國における人口賣買の風に乗じたるものと解せられよう。

かくして、西北邊における人口賣買は、懲罰の嚴重化と人口の收贖という硬軟二様の對策によつても根絶しえなかつたのであり、さきの女口の私市の禁令の如き、いまや何らの效力をも有しえざることとなつたのである。

五

かかる間において、至道元年（九九五）八月、西北緣邊諸州の漢人に對して、内屬タングートとの通婚禁止令が出されたのであつた。すなわち、宋史卷五太宗紀二、同月癸卯條に、

禁西北緣邊諸州民與内屬戎人昏娶。

とある。この記事は續資治通鑑長編・宋會要に對應記事なく、太宗皇帝實錄もこの年月の條を缺いており、ために記事内容を宋史の記事以上には詳かにしえないが、さきに陳願遠氏は中國歷代における婚姻範圍を論じた際、宋人が前

代における公主和親を斥けてこれを絶つたことを指摘した上、なお宋人は「族際婚」をも禁止したとして右の記事をあげている。⁹⁴ここにいう「族際婚」の稱呼は異民族相互間の通婚の意味に用いられたものであらう。もとより、公主和親の禁絶に關しては、宋人の間に對外關係の切迫化に伴つて昂りつあつた排外思想との關連は一應想定されるところであり、「族際婚」禁止についても、その關連は一概に否定しえないのであるが、しかしそのみを以て解釋づけるのは如何であらうか。ここに問題視されるのは、北宋期にみられた一連の胡俗胡習の禁止事件で、それは唐代における胡俗の流行と比較して、著しい時代差をしめすものとして注目すべく、おそらく排外思想とは不可離のものとみなされるが、それは左の如く列擧されるのであつて、さきの通婚禁止令よりもはるかに後年のことであるのが問題となるのである。いま、禁止事項とその年次ならびに參考文獻をしるすならば、

(1) 勘箭の禁止 熙寧中（一〇六八—七七）。

沈括の夢溪筆談卷一故事一に、「大駕鹵簿中。有勘箭。……本胡法也。熙寧中。罷之。」とあり、これによれば、

勘箭の儀は北方民族、おそらく契丹族に由來すること
は疑いない。^{四〇}

(2) 蕃曲・氍笠の禁 政和中(一一二一—一二七)。

能改齊漫錄卷一事始。

(3) 蕃裝・胡服の禁 宣和五年(一一二三)以前。

宋會要刑法二之八八。

(4) 重ねて胡服に類するものの禁 宣和五年(一一二三)。

宋會要同右條

となる。以上は目下氣附いたもののみで、なお失檢なきを保し難いが、以上の中、最も早期に屬する勘箭の禁止ですら、通婚禁止令よりは半世紀以上も後であり、他の諸件にいたつては、はるかに年代を下廻るのである。これよりしても、

通婚禁止令について直に思想的背景を想定するのは困難であらう。ひとり通婚禁止令のみが、以上列擧せる諸件とかけ離れた時期に出され、しかもそれらがひとしく同様な思想的背景を有するものとは考え難い。一體、中國民族の民族主義ともいふべきものは、南宋に入つて明瞭な意識形態をとつたとされるのであり、^{四一}それより以前、北宋の、しかもその初期にみられるこの禁令が思想問題に直接結び附け

て解釋されるのは妥當とはいえない。さらに、それは、時代をばば等しくする遼の場合の如く、征服者の立場を強化せんがために、契丹族と治下の諸民族との通婚を禁じたものとも全く類例を異にする。島田正郎氏は余靖の武溪集卷一八、契丹官儀に、「四姓雜居。舊不通婚。謀臣韓紹芳獻議。乃許婚焉。」とある記事をあげ、韓紹芳の傳(遼史七四)に、

「重熙間(一〇三二—一〇五四)。參知政事加兼侍中。」とあるのを參照することによつて、通婚の禁止されたのは重熙年間以前のことと考定されたが、^{四二}禁止の理由は、「民族の純血を維持し、征服支配民族としての優越性を固持」せんとするものであつたとして宜いであらう。しかも、かかる行き方は宋の場合には全然考えられぬところなのである。

さて、小篇冒頭にのべた、中國前代における蕃漢通婚の事例よりしても、西北邊における蕃漢混住の結果、同方面において蕃漢通婚をみるにいたつたことは、推測に難くない。これに關するデータは乏しいけれど、すでに五代後唐の同光二年(九二四)十二月の記事として、

党項薄備香來貢良馬。其妻韓氏進駝馬。(冊府元龜卷九七

二外臣部朝貢五)

とみえる中の韓氏の如き、張澍の「西夏姓氏錄」にも著録されているが、恐らく漢人出身にしてタングートと通婚せるものとみられ、宋代における通婚の事例は、年代を降るけれど、西夏支配層の中に徴しうるのであつて、西夏四代の毅宗李諒祚の後、梁氏は「其先中國人。」（夢溪筆談卷二五雜誌二）といわれ、梁氏の生子が次代の惠宗李秉常であり、さらに秉常の後にして崇宗李乾順の母もやはり梁氏出身であつた（宋史夏國傳下）、仁宗李仁孝の後、羅氏も「本中國人。」と伝えられる（西夏書事三七、宋乾道三年三月條）。これらの事例よりして、宋初、西夏建國以前においても、西北邊において蕃漢通婚の行われしことは充分推測されよう。

かかる間において突如として出された通婚禁止令の有する意義は如何であつたか。さきの「女口の私市」の禁は女口が内屬タングートに没入するのに對處したものであつたが、今度の禁令はさらに徹底的に、西北邊混住地域の漢人にたいして内屬タングートとの通婚を禁じたもので、きわめて抜本的な處置といわざるをえない。それは、五代以來みうけられる蕃漢通婚という西北邊における現實を全く無視した立場に立つものであつたが、それは果していかなる

事情に基くものであろうか。これが解釋に當つても、當時における現實の問題に立脚せねばならぬであらう。

六

李繼遷の動亂は其後も依然として擴大の一途を辿るのみであつた。繼遷と宋の相剋は結局、西北邊のタングート熟戸の爭奪をその焦點とするものであり、それは、繼遷にとつて、西北邊における覇權確立のための、唯一の道であつたのであるが、その場合、双方から目標としてねらわれたのは、麟・府・銀・夏・宥・豐諸州のタングート諸族であつた。⁽⁹⁾そして遂に、淳化三年（九九二）、鄭文寶の畫策に基いて實施された鹽禁を契機として、タングート熟戸の「四十二族首領」（宋史夏國傳上）が大同團結して繼遷に附するにおよんで、繼遷の勢力は俄然強盛化したのであり、翌淳化四年八月、宋は遂に鹽禁を弛めざるをえぬこととなつたのである。⁽¹⁰⁾

ここで特に注目すべきこととして、翌淳化五年（九九四）一月、繼遷が占領下の綏州の住民を平夏に徙した事件があげられる。太平實字記卷三八には、綏州について、「皇朝

管主客戸二千八百八十五」とあり、住民は殆んど漢人で占められたものの如くであつたが、平夏とは、「從銀・夏至青白兩池。惟沙磧。俗謂平夏。」（長編三五、淳化五年春正月條、宋琪の奏文）と記されるが如き荒涼たる土地であり、この遷徙事件たるや人心の不滿を買うこと甚しく、牙將高文晁はこの機に乗じて反亂を起したため、ついに綏州放棄のやむなきにいたつた（宋史四八五夏國傳上・西夏書事五）。同年三月、李繼隆の討伐軍は夏州に入り、兵を留めて銀・夏兩州を鎮守せしめたが、翌四月、詔して夏州故城を墮たせ、その住民を綏・銀等州に遷し、官地を分ち給してこれを安撫したのは（長編三五・宋會要方域八・三二）、宋の西北邊對策の中、注目さるべきものの一であつて、それは繼遷が今後再び夏州を根據たらしめぬように顧慮せるものに他ならない。かくして同年七月にいたり、繼遷の屈服をみたが（長編三六）、翌至道元年（九九五）一月、繼遷の貢使、張浦に授官した上、これを體よく抑留したのは（西夏書事五）、かれが繼遷の謀臣として重視されいたるがために他ならない。しかも繼遷は一旦屈服しながらも、次第に勢力を挽回し、この年、漸次近隣のタングート諸族を合併し、七月、熱戸

の匪泥族の首領は部民を繼遷に劫略されて、宋に援護を求めるにいたり（宋史四九一党項傳・西夏書事五）、西北邊の形勢は頗に險惡の度を加えるにいたつたのであつた。

さきの通婚禁止令の出されたのは、實にかかる際においてであつた。相次ぐ繼遷の活躍により、タングート熱戸の動搖著しく、その動向は明確さを缺くにいたつた結果、宋側の不信任は愈々助長されたものとみるべく、逆にこの間、西北邊の漢人にたいしては、極力これを手中のものたらしむべく考へたことは、前述の徙民・安撫策にみらるるが如くであつて、前記の張浦抑留事件の如きも、またその例外たりえない。しかもこの間、宋側としては、西北邊の漢人それ自體にも警戒せざるをえなかつたのではないかと推測される。さきに、五代後唐の長興四年（九三三）、後唐の夏州攻撃に際し、隰州刺史劉遂凝は獻策して、「綏・銀二州の人、みな内嚮の意」ありとしたが（五代史記五一范延光傳）、范延光はこれに對し、「綏・銀の戸民は、朝廷常に撫育を加うるも、部落と雜處するによつて、その心翻覆多端」なりときめつけたのであつて（冊府元龜三八九將帥部請行）、かかる懸念はもとよりこの時のみのものではなかつたであろ

う。實際、宋初においても、宋史卷二七四王侁傳には、

（王侁）遷使靈州・通遠軍。及旋言。主帥所留牙兵率與邊人交結。頗桀黠難制。

とみえ、これは長編一九、太平興國三年十一月條に對應記事があり、この時以前のこととしてしるされているのであるが、西北邊漢人への不信感のあらわれとみなされる。さらに、禁令よりも少しく年代を降るが、長編五二に咸平五年（一〇〇三）秋七月甲午朔にかけて、

石隰路部署言。本路緣河至蕃部界皆山險。請以步卒代廳子軍六指揮。朝議亦以。此軍本綏・夏之民。石州近賊境。恐越逸非便。乃命徙於磁・相州。

とみえ、綏・夏兩州の漢人にたいしては、その動向に懸念せざるをえぬというのが實情であつたのである。

以上の如き漢人がタングト熟戸と混住し、しかも宋の廟權の急速なる後退によつて、外地化しつつあつた西北邊にたいし、宋としては新たな處置を講ぜねばならなかつた。あえて漢人・タングト熟戸の兩者を離間せんとするが如き禁令を出したのは、それによつて西北邊の漢人をタングトに對して閉鎖してその混融を防止し、一種複合社會と

して固定化せしめることによつて、宋の西北邊防衛のための障壁たらしめんとするものであつたと解したい。前代の、しかも他地域での事例ではあるが、舊唐書卷一七七盧鈞傳に、盧鈞が嶺南の節度使たりし時の政績をしるした中に、

先是。土人（土著の漢人）與蠻獠雜居。婚娶相通。吏或撓之。相誘爲亂。（盧）鈞至。立法。俾華蠻異處。婚娶不通。蠻人不得立田宅。由是徼外肅清而不相犯。

とみえるのも、この場合参照さるべく、おそらく相似のケースとみなして差支ないであろうし、通婚禁止令の如き、おそらく前代の事例を参照するところがあつたであろう。

七

以上、北宋初期における西北邊の蕃漢混住地域における諸問題を李繼遷の興起という新なる政治情勢との関連において把えつつ、考察を試みた。西北邊の漢人社會はタングト族の遷住の結果、一種複合社會を形成しつつあつたが、政治情勢の新展開とともに複雑なる様相を呈したのであり、それ故に宋朝當局者としても特別な關心を以てこれを見守りつつ、次々に新なる處置を講ぜざるをえなかつたので

ある。すなわち、漢人女子の出塞はこれが禁止規定のあつたにも拘らず、タングート熟戸の入貢に際して、漢人女子が、私かに購われて伴い去られ、しかもそれが頻發した結果、これが禁令をみるにいたつた。それは結局、唐律以來の法の規定に基づきつつも、現實の問題に應じて規定を具體化するものといえるであらう。しかもこれらの規定にも拘らず、西北邊の動亂による漢人の貧窮化のために頻發した人口賣買の結果、タングートへ没入する漢人は少しとせず、それは宋の没蕃漢人招収策を著しく阻害したのであつた。これに加えて、李繼遷の活躍の結果、西北邊の情勢がいよいよ切迫した際において、宋が同方面の漢人確保のために投じた一石は、タングート熟戸との通婚に關する禁止令であつたのである。

もとより一片の通婚禁止令の如き、その意義は別として、その效用の程はこれを明らかにすべくもない。而して西北邊の地にタングートのヘゲモニーが確立せられて西夏の建國をみたのち、西夏支配層において蕃漢通婚の屢見することとはさきにあつたが、それはひとり支配層のみのことではなかつたであらう。しかし乍ら、これらの通婚にも拘らず、

それによつて同方面の漢人がタングートに混融し、同化し去つたのではなかつた。西夏の建國よりその瓦壞まで、實に二世紀にわたつて、異民族の支配下にありながら、元代に入つても、タングート陷没の漢人は「漢河西」として、「蕃河西」なるタングートと明確な區別を有したことは、錢大昕の元史氏族表(卷二)にもしるすところであつて、そのことは漢人社會が複合社會的性格を持続したことを裏書するものであるが、一方、西夏(タングート)史研究の立場よりするならば、西夏内部にあつてかかる漢人社會がいかに發展して行つたかということが重要問題である。すでに、若干の人々によつて、諸民族の「混合國家」として特質づけられたこの國において、その支配層がいかに異民族支配に努めるとともに、これら異民族をその國家發展の上に活用したかということは、今後に残された問題であり、それら異民族の中にあつて、漢人のもてる役割がとくに著しかつたことはさきにあつたが、それはすでに西夏建國の成就する以前より、西北邊における混住化の進展とタングート勢力の擡頭とに伴つて胚胎しつゝあつたことなのであり、それ故に、西夏建國の問題を究めるためには、建國成立以前に溯つて西

北邊の漢人の問題をあらゆる角度から解明せねばならない。小篇においては、一應宋の對西北邊政策という觀點に立ちながらも、宋とタングートとの交渉過程にたえず關連せしめつつ、漢人の問題を中心として考察をすすめることによつて、西夏建國の前史の一面を窺はんことを期したものである。

(昭和三十四年五月五日稿了)

補註

- (1) 羽田亨博士「漢民族の同化力説について」(羽田博士史學論文集上巻所収)七二四—五頁・王桐齡氏「支那に於ける外來民族の漢化に就いて」(史學雜誌四七編一一號)八頁以下。
- (2) 「蒲壽庚の事蹟」七三—五頁
- (3) 同右、七三—四頁
- (4) 舊五代史の記事は辭海(合訂本三七六頁)に引くところで、諸橋徹次博士「太漢和辭典」三卷二八八九頁にもこの記事を引いている。
- (5) 以上については、拙稿「唐代に於ける党項の發展」(東方史論叢第一所収)ならびに「五代期における夏州政權の展開」(東方學第九輯)參照。
- (6) 以上の形勢については、追て發表すべき拙稿「李繼遷の興起前後」に詳論する。
- (7) 大崎富士夫氏「富弼の流民救済法」(東洋の政治經濟所収)一六八、一八四—五頁。なお、穗積文雄氏「流民考」・「流民續考」(經濟論叢七五卷一・六號)にも宋代の流民對策にふれられている。

- (8) 拙稿「唐代に於ける党項の發展」補註一二五參照。
- (9) 宮崎市定博士「西夏の興起と青白鹽問題」(アジア史研究第一所収)三〇〇頁
- (10) 玉井是博氏「唐の賤民制度とその由來」(支那社會經濟史研究所収)・仁井田陞博士「支那身分法史」七二三頁以下・七八〇頁など・有高巖博士「元代奴隸考」(小川博士還曆記念史學地理學論叢所収)
- (11) 仁井田博士「中國法制史」一二五—六頁
- (12) 拙稿「唐代に於ける党項の發展」九三頁
- (13) 同右、九三頁ならびに補註一五七
- (14) 「中國婚姻史」(中國文化史叢書所収)二八頁
- (15) 箭内互博士は、勘箭の儀が宋史所見のものより以前に中國に存せしことを豫想されて、遼の勘箭の儀は中國に由來すると説かれたが(「元朝牌符考」蒙古史研究所収、八六三—四頁)、松井等氏が本文所引の夢溪筆談の記事によつて、勘箭が「蓋し契丹の風俗」に由來すべしとされたのに従うべきである(契丹人の衣食住)滿鮮地理歴史研究報告第九、一三〇—一頁)
- (16) 宮崎博士「東洋の近世」一三四頁。なお、宋代の排外思想については、松井等氏「支那社會思潮」(岩波講座世界思潮所収)二七頁にもふれられている。
- (17) 「遼代社會史研究」一八六頁
- (18) 同右、同頁
- (19) 山本澄子氏「五代宋初の党項民族及びその西夏建國との關係」(東洋學報三三卷一號)二六—三七頁
- (20) 宮崎博士「西夏の興起と青白塩問題」二九六頁以下
- (21) W. W. Rockhill: The Journey of William of Rubruck, p. 150. note. Owen Latimore; China: A Short History. 邦譯一〇五頁など。

guards for the warlords who had the central and local administrative power. The competent group which took over the administrative power at the end of Later Han 後漢 appointed their dependents and followers as officials and soldiers. As the ages went on, the superiority and the control of the emperor over the warlords became stronger. As the result of this, many kinds of bodyguards were changed into a guard of honour, appointed by the emperor and limited in number. The warlords became the emperor's bureaucrats, and their private followers, the office-boys.

Some Government Prohibitions in the Early Sung 宋 Dynasty in Connection with the Tangut

Seiro Okazaki

The foundation of the Hsi-hsia 西夏 State by Li Chi-ch'ien 李繼遷 at the beginning of the Sung Dynasty caused a tense situation in the north-western frontier of China. Sung took such policies against this phase as (1) prohibition of women-trade, (2) that of international marriage. The Chinese-foreigners compound aera had been formed in this region as the result of the movement eastward of the Tangut since the middle of the T'ang Dynasty. The former prohibition was issued by the Sung government under these conditions. But many poverty stricken Chinese were sold to the Tangut in spite of the government prohibition. Since the Tangut became more active, Sung took the second policy to protect the Chinese from the Tangut and to settle the compound society.

On ʔulāms under the Sāmānids Dynasty

Keishiro Sato

The author will study the character of ʔulāms, especially that under Sāmānids Dynasty, among some kinds of servants who took important parts in western Asia under Islām. The ʔulāms, as well as being slaves, were servants who could be traded for money. The Turkish were the most expensive among them. The ʔulāms were engaged in mean occupations

and were sometimes dispatched by the emperor to the countryside on the business of a lawsuit or compulsory tax-gathering. They were highhanded enough to take bribes. After the middle of the Abbasids Dynasty, troops of Turkish ṛulāms appeared as the imperial guards of the emperor. They were officially equipped, salaried, disciplined professional troops. They were different from hired troops in the point of having no freedom to make a contract. The ṛulāms soldiers might be promoted to the highest knights over the heads of the regular soldiers and even to the post of governor, when they were recognized by the emperor.